# 舫い浜に生きる　20

## 先人の伝え守り結束

六ケ浦漁港（陸前高田）

先人が残した石碑を前に、地域の絆を再確認する六ケ浦地区の住民＝陸前高田市広田町

六ケ浦漁港　広田半島東側の大野湾に面し、ワカメやホタテの養殖やウニ漁、小型定置網、刺し網などが盛ん。六ケ浦地区の鈴木家は陸前高田市広田町の中でも有数の旧家として知られ、400年の歴史がある。本家の鈴木克次さんは18代目。

「昔の人の教えは正しいなあ」「いいことが書いてある」。集まった男たちが、石碑の言葉をかみしめる。

「それ津波　機敏に高所へ」。1933（昭和8）年の三陸大津波の後、陸前高田市広田町の六ケ浦地区に建立された石碑には、地域を守る先人の思いが受け継がれている。

28世帯、約120人の集落は大野湾に面し、生活は浜とともにある。半数以上が親戚で、冠婚葬祭や地域行事は集落総出で行う。絆は強く、震災にも結束して立ち向かった。

3月11日、同集落は道がえぐれきで埋まり孤立。高台にある会館に集まった住民たちは毛布、布団、ろうそく、石油ストーブを集め、持ち寄った米をおにぎりにして配った。

翌日からは毎朝ミーティングを開催。被害の有無に関係なく全世帯が参加し、役割分担を確認した。

ラジオを携帯した見張り役を置き、5、6人のグループで被害を受けた家のがれき撤去は、「助け合うのは当たり前のこと」とさらり。

避難所のリーダー役を務めた漁業畠山英美さん(63)も「家が無事だった人も参加してくれた。先輩たちから引き継がれた絆があり、まとまり良く避難所が運営できた」と振り返る。7月上旬に避難所は解消し、11世帯が仮設住宅に入居したが、月1回の会合には全員が集まっている。

区長の鈴木雄祐さん(68)は「世帯数の減少が心配だが、昔から続いてきたこのまとまりを守っていきたい」と決意は固い。

「舫（もや）い」は、船と船とをつなぎ合わせることや、寄り合って一緒に仕事をすること、集落内の共同作業や利益の共同分配などを表す。沿岸地方では地域のつながりを示す「結（ゆい）」の意味で使われることも多い。

## いわて　東日本大震災

### 清波てんでんこ

題字・山下文男さん

アイスランドから贈られた帽子やソックスを手に、岩間美恵子代表（左）と談笑する関川和子さん＝宮古市藤原3丁目のきつつき工房

宮古市太田　自営業、琴教室主宰　関川　和子さん(69)

車を運転中、閉伊川に架かる宮古大橋で大きな揺れに遭った。目的の「きつつき工房」へ着き、友人の岩間美恵子代表(68)と「こんな地震初めて」と話していたところ、別な友人から「逃げて」と声が掛かり、再び車で市街地を抜けた。浸水地域を過ぎてから渋滞に巻き込まれたが今思えば危ない行動だった。

**温かい気持ちを実感**

経営する食料品店は休まず開けた。レジは使えず手計算。お客さんは辛抱強く並んで待ってくれたのでありがたかった。3月半ば、東京の友人の妹でアイスランド在住のソルザソン・美也子さん＝宮古生まれ＝から多くのセーターやマフラーが届き始めた。現地の人が被災者のため毛糸を手編みした品だった。きつつき工房の協力も得て配布させてもらった。

温かい気持ちを実感した。

6月には群馬県の琴愛好家たちが「楽器を流された人のために」と琴6面や譜面台を自ら届けてくれた。恐ろしい大津波だったが温かい気持ちもたくさん寄せられ励まされた。

～被災地からのメッセージ～

**復興へできることを**

野田村野田　岡山　岳人君（野田小4年）

家にいた時に大きな揺れを感じ、おばあちゃんと野田小に避難した。家は流れなかったけど、変わり果てた村を見て、自然の力はすごいと思った。こども新聞作りに参加し、自分だけでなく多くの人が大変だったんだと感じることができた。これからも村の復興に向けてできることをしていきたい。また元の村に戻ってほしい。

～被災地へのメッセージ～

**元気と希望を太鼓に**

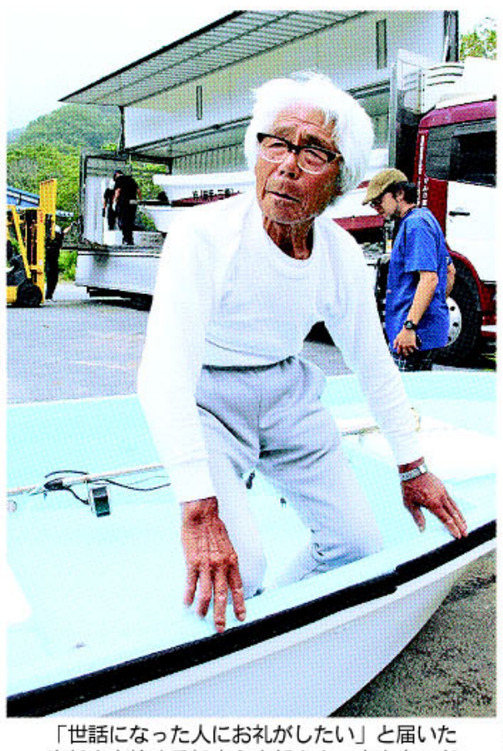
和歌山県岩出市中島　穂積　勇貴君（紀北農芸高2年）

もりおか復興支援センターで「農芸太鼓」を披露した。被災された方を含め、見に来てくれた人に元気と希望を与えたいという気持ちで演奏した。伝えられたか不安だったが、被災された方にお礼を頂き、やってよかったと実感している。岩手の人が和歌山に来ることがあれば温かく迎え入れたいし、頑張れ東北と伝えたい。

## 93歳漁師　再出発の船

### 寄贈受け、お礼誓う

宮古・田老　最高齢組合員の松本さん


「世話になった人にお礼がしたい」と届いた漁船を点検する松本永次郎さん＝宮古市田老

宮古市の田老町漁協（小林昭栄組合長、組合員663人）最高齢組合員の漁師松本永次郎さん(93)に29日、遠野市や三重県など県内外の善意が詰まった小型漁船が贈られた。松本さんは8歳で漁を始め、田老の養殖漁業をけん引してきたが、津波で漁船2隻を流失。「世話になった人にお礼がしたい」と再出発できる日を待ち望んでいる。

松本さんに贈られたのは、漁協に届いた中古の小型漁船3隻のうち1隻。三重県内の漁協組合長や水産団体でつくる三重水産協議会が「絆」プロジェクトと銘打って漁船を確保し、田老川河口にある水産加工団地に運び込んだ。

松本さんは93歳とは思えないほどの身のこなしで船体をくまなく点検。「身に余る支援。個人で漁に出られるようになれば出たい」と今後は天然ワカメやコンブなどの漁再開へ腕をまくる。

「現役ばりばり」と周囲が評する松本さんは、長年にわたる経験で主にコンブの洗浄や乾燥の仕方を研究。コンブ養殖の先駆者となり田老の水産業をリードしてきた。

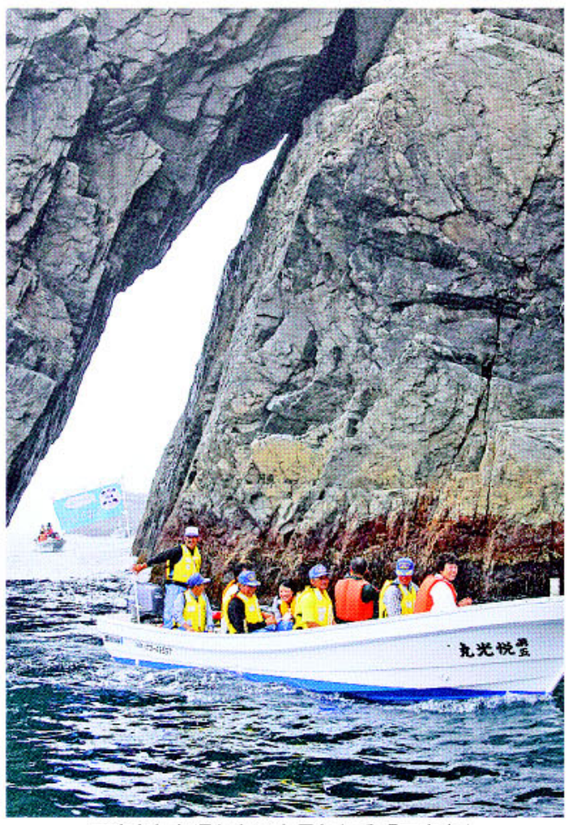
田老町漁協の畠山康男副組合長(62)は「研究熱心な人で松本さんなくして養殖は成功しなかった。健康に気を付けて、まだまだ若い人を指導してもらいたい」とエールを送る。

自宅が被災し現在は田老地区のグリーンピア三陸みやこの仮設住宅で暮らす。今回の寄贈は孫の龍児さん(37)と、3月20日からグリーンピアにボランティアに訪れていた遠野市の六十苅隆美さん(39)との出会いが契機。

六十苅さんが、松本さんが漁業再開に意欲があることを知り漁船探しに着手。インターネットで呼び掛けると「リレーみたいに知り合っていった」と賛同者が増え、三重水産協議会が寄贈に名乗りを上げた。六十苅さんは「まだ海に出られないかもしれないけれど、うれしそうでよかった。長期的に支援していきたい」と「絆」を強く結んでいる。

## サッパ船観光が再開

田野畑　断崖の迫力を満喫


正直者しか通れないと言われる「正直穴」を抜けるサッパ船＝田野畑村の北山崎付近

田野畑村の北山崎周辺の断崖を小型船で巡る観光ツアー「サッパ船アドベンチャーズ」は29日、震災以来約140日ぶりに再開した。船8隻のうち6隻が流される被害を乗り越えての再出発。運営するNPO法人体験村・たのはたネットワーク（道合勇一理事長）のスタッフやガイド役の船長ら関係者に久々の笑顔が戻った。

羅賀漁港でセレモニーが行われ、上机莞治村長が「きょうが観光復興の第1弾だ」とあいさつ。中古船5隻を購入する時に尽力した青森県東通村の角本雄之岩屋漁協組合長に感謝状が贈られた。

第1便は、埼玉県から訪れた観光客と関係者が、現在使える全4隻のサッパ船に分乗して出発。船長8人の似顔絵が描かれた真新しいのぼり旗をはためかせ、船は断崖や岩場に迫った。正直者だけが通り抜けられると言い伝えられる「正直穴」も鮮やかに抜けた。

さいたま市から訪れた美濃島悠斗君(8)は「いろんな自然があってびっくりした。岩がすごく大きかった。船長の一人、同村羅賀の漁業川畑州作さん(62)は「やはり海はいい。多くの人に北山崎の海岸美を満喫してほしい」と願った。

## 待望　ウニ漁口開け

宮古・重茂　例年の2カ月遅れ

箱眼鏡とさおを使い、海中のウニを探る漁業者＝宮古市重茂

宮古市の重茂（おもえ）地区で29日、今年初のウニ漁が口開け（解禁）された。震災の影響を受け、例年よりも約2カ月遅れの漁に早朝から多くの漁業者が沖へ繰り出した。

漁は午前5時の合図とともに開始。流失し、少なくなった船を分け合うため2、3世帯が一組になり操業した。箱眼鏡で海中をのぞき込み、先端に網が付いたさおで採る。数分後、さおを引き揚げると、網の中には黒々としたウニが現れた。次々と船上に揚げられ、1時間ほどで専用のかごを満面の笑みを浮かべた。

ウニは各家庭の作業場で焼きウニに加工され、主に首都圏で販売される。

重茂漁協によると、ウニは例年6月から8月のお盆前までが漁期。津波で陸に打ち上げられたり、沖へ流されたため、全体の量は少ないという。昨年18回だった口開けは、今年は今回を含めて2回の予定で、例年25㌧前後の水揚げ量は1㌧前後に落ち込む見込み。

それでも漁業者にとって、夏到来を告げる待望の漁。粟津勝治さん(73)は「震災後、初めて沖に出た。いつもと同じくらい量も採れたからうれしいね」と満面の笑みを浮かべた。

## ありがとう　日赤救護所

陸前高田　県内で活動終了

アーチをくぐり、市民に見送られる救護班の一員＝陸前高田市

日本赤十字社は29日、陸前高田市の第一中敷地内に設置された救護所を閉所し、県内全ての医療救護活動を終えた。心のケアなどの支援は引き続き行う。

閉所式は、避難所の同校体育館で市民ら約100人が参加して行われ、戸羽太市長が「市民のため長期にわたり全力を尽くしてくれた」と約4カ月半の労をねぎらった。利用者を代表して中学生も感謝の言葉を伝え、救護班に花束が贈られた。

日赤県支部の圃田清昭事務局長は「復興に向けた支援を続けていきたい」と思いを新たにした。

同市では約1万4千人が救護所を利用。閉所式終了後、市民は「ありがとう」と感謝の言葉を贈り、アーチをつくって救護班を見送った。同避難所で生活する磐井昭さん(68)は「夜の10時でも診てくれた。体調を崩すことはあったが安心して生活できた」と感謝した。

日赤は県内7カ所に救護所を設け、巡回診療を含め17カ所で救護活動を展開した。震災直後から同日まで県内外から303班、約1800人を派遣し、約3万1千人を診療した。県立病院が再開するなど医療態勢が整ってきたことから救護所を閉所した。

## 六本木ヒルズに　住田の木造仮設

被災地支援へ展示

六本木ヒルズに展示された杉材の木造仮設住宅＝東京・港区

【東京支社】住田町で被災者用に使われている木造仮設住宅が31日までの3日間、東京・港区の六本木ヒルズに展示され、注目を集めている。

音楽家の坂本龍一さんが代表を務める森林保全団体「モア・トゥリーズ」（東京）が開いた被災地支援イベントの一環。同団体は地元産材で仮設住宅を建設する住田町の取り組みを支援している。

杉材を使用した仮設住宅は2DKの約30平方㍍。同町に93棟が完成し、陸前高田市や大船渡市、福島県などの被災者が入居。同団体はネット募金などで総額約3億円の支援を目指す。展示用仮設住宅の前にも募金箱を設置。訪れた人は住宅で木のぬくもりを感じ、次々と善意を寄せた。

初日に訪れた住田町の多田欣一町長は「復興を関東圏の方々に後押ししてもらえればありがたい」と話した。

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。